
第1章・場面1 灼熱の朝

目を覚ました瞬間、胸にのしかかるような熱気に息が詰まった。エアコンはフル稼働しているはずなのに、部屋の温度は三十一度を下回らない。窓を開けるなど自殺行為だ。夜が明けたばかりだというのに、気象庁は「本日の最低気温三十五度」と告げていた。これがいま、2065年の日本の夏、いや、地球の夏だった。

「.....また寝汗で髪がぐちゃぐちゃだ」

独り言を呟きながら、私は乱れたショートカットを指で整えた。ドライヤーで乾かす気力も奪われるほどの湿気と熱気。毎朝のこととはいえ、今日も一日この灼熱と向き合うのかと思うと、胸が重くなる。

私は飯塚さくら、三十一歳。JAXAの研究職に就いてもう五年になる。博士論文は自然言語処理の分野で書いた。いまは情報工学を軸に、人工知能の解析応用を専門にしている。結婚はしていない。こんな生活では、誰かと暮らす余裕もない。

ベッドから起き上がり、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して一気に飲む。喉を通る冷たさが、一瞬だけ生き返らせてくれる。外はすでに太陽が暴れ始め、窓越しでも皮膚を刺すような熱を感じた。

「ニュース」と声をかけると、空間に光が走り、ニュースキャスターが硬い表情で浮かび上がった。

「ツバル、モルディブは完全に水没が確認されました。バングラデシュ沿岸の都市も住民の大半が高台へ避難しています.....」

私は歯を磨きながら画面に目をやった。海面は2000年時点から一・五メートル上昇している。大都市は防波堤を築いて延命しているが、それも限界に近い。祖父母が住んでいた横浜の沿岸地区も、すでに更地になって久しい。

コーヒーを淹れる気力はなく、栄養ゼリーを口に流し込む。出勤までに体力を温存しておくことが何よりも大事だ。通常なら在宅勤務が中心だが、ここ数日は例外。数日前から発見された「国籍不明の飛行物体」のせいで、JAXAは連日警戒態勢だ。

その物体は、翼を持つ航空機のような形をしていた。低軌道を周回する姿は世界中で観測され、各国が軍事的な緊張を強めている。ミサイルを発射すべきか、ただ観測に徹すべきか、意見は割れていた。

「.....まったく、なんでこんな時に」

私たちは温暖化で手一杯なのに、空から新しい問題が降ってきた。

出勤準備を終えると、私は玄関のラックから「晴れコート」を手にとった。外側に太陽電池、内側にはペルチェ素子が仕込まれた特殊コート。通称・晴れコートは、

直射日光の下でも体表を三十度前後に保ってくれる。この十年、日本人の必需品になった。

ファスナーを上まで引き、フードを被ると、ひんやりとした冷気が頬をなでた。これがなければ一步も外に出られない。

玄関を出ると、突き刺すような光が全身を襲った。アスファルトは白く揺らめき、車のボディは金属を超えて炎の塊のようだ。遠くでサイレンが鳴っている。熱中症で搬送される人は、今では日常風景になった。

「はあ.....」

駅までの道のりを、コートの冷気にすがりながら歩く。地下鉄に入ると、冷房の冷気が押し寄せ、ようやく呼吸が楽になる。乗客たちは皆、汗まみれで、無言で、「ビジュア」と呼ばれるウェアラブルデバイスが瞳に発する映像を追っていた。

ニュースアプリには「未確認飛行物体、依然として正体不明」「軍事衛星ではない可能性高まる」と見出しが並ぶ。心臓が不意に強く打った。もしもこれが地球外からの何かなら——。私は震える指先を握りしめた。

JAXA本部に着く頃には、私はすっかり汗だくだった。警備員にIDを見せ、冷たい空気の研究棟に入る。廊下の壁には熱を防ぐための冷却パネルが並び、わずかに霧状の水が散布されていた。

自分の研究室に入ると、空調の効いた空気が体を包む。コンピュータを起動し、メールを確認する。

「今日こそ通常業務.....とはいかないか」

机の上の端末が赤く点滅している。未確認飛行物体の軌道解析のデータだ。ここ数日は毎朝これを眺め、AIでシミュレーションを走らせるのが私の仕事になっていた。

ディスプレイの上で、銀色の翼を持った飛行体が青い軌道を描く。地球を周回するその姿は、美しくも不気味だった。

「.....今日も無事に回ってる。さて、どんな動きを見せてくるかな」

私はマグカップを手に取り、ぬるくなった水を口に含んだ。今日も長い一日が始まる——そう思った、その時だった。

研究棟全体に警報が鳴り響いた。

「未確認飛行物体、軌道を変更！ 大気圏への降下コースに入りました！」

私はマグカップを取り落としそうになりながら、画面に目を凝らした。ついに、未知の存在が地球に触れようとしていた。
